

高齢者ホーム最前線

スウェーデンの 質の高い介護と日本の 融合させ作り上げた空間



北欧風の気品と風格が漂う「新浦安フォーラム」の正面



広々とした中庭にはテーブルとイスがあり、くつろぎの場になっている

福祉国家スウェーデンでは100年も前から高齢化社会が始まったという。その長い歴史の中で培った介護理論とはどういうものか。さらに日本のこのころと叡智を融合させて実践する舞浜倶楽部の新浦安フォーラムとは!?



舞浜倶楽部 代表取締役社長
グスタフ ストランデル氏

舞浜倶楽部 新浦安フォーラム



北欧風暖炉のある、シックで落ち着いた雰囲気のラウンジ



今日の昼食はざるそばに揚げたての天ぷら。栄養やカロリーを考えた手作りの料理を提供



家族や友人など来客者と一緒に、コーヒーや食事を楽しめる明るいカフェテリア

長。ストランデル氏は少年時代に剣道に出会い日本に興味を持った。その後、交換留学で日本へ。ストックホルム大学に進学して福祉を学び、スウェーデンと日本の介護現場の調査をする。在学中も何度も日本を訪れ、卒業後は日本の企業に就職。在日スウェーデン大使館からの依頼でスウェーデン福祉研究所を立ち上げた、いわば日本とスウェーデンの介護事情のエキスパーだ。

知識に裏打ちされた心を込めた丁寧さが基本

を維持できるようなホームの運営、環境作りを常に意識しています」と、ストランデル社長が舞浜倶楽部の理念を話してくれた。

介護の現場では「ホスピタリティ」という単語を耳にする。直訳すると「おもてなし」という意味で用いられるのが一般的だ。舞浜倶楽部も「ホスピタリティ」を考えた介護を実践しているが、「おもてなし」とはニュアンスが違うという。

「ホームは毎日の生活を送る場なのです。『おもてなし』は、ゲストとホストのような感覚があり、ふさわしい言葉とは思えません。そこには入居者とスタッフの間の距離感があ

ります。私は心をこめた『丁寧』な対応が重要だと考えています。そして、心をこめた丁寧な対応をするためには『知識』が必要です。知識に裏打ちされた丁寧さこそ、ホスピタリティの基本です」と、ストランデル氏。

舞浜倶楽部の介護に必要な



個室は23㎡以上というゆとりのある空間は、もちろんプライバシーにも十分配慮されている

人間力と総合力で 多様なニーズに応える

全国で展開するヒューマンライフケアの手がける事業は、施設系サービスのみならず、デイケア、グループホーム、訪問介護など幅広い。その総合力が活かされたホームが、北海道札幌市の高齢者住宅「ラ・メージュ」(サ高住登録申請中)だ。元々銭湯だった1階の大浴場は、デイケア用に改装され、デイケアの利用時間外には入居者も利用できる。30㍍55mある広々とし

た住まいに、安価で入居できるコストパフォーマンスも魅力。少し足を運べば北海道の大自然が広がっており、都心から移住しゴルフやハイキングを楽しむ高齢者夫婦も多いという。一方、首都圏の介護付有料老人ホーム「千葉院内の郷」「鳩ヶ谷の郷」は、都心からのアクセスの良さが光る。千葉ではホーム内の介護のほかデイケア、訪問介護を併用でき、鳩ヶ谷ではユニットケアを実践する等、手厚い介護も期待できる。総合力を活かした複合的なサービスが、支持を得ている。

教育・人材事業を手掛けるヒューマングループは、介護にも力を入れている。総合力を活かした複合的なサービスの魅力とは？



高齢者住宅 ラ・メージュ



ヒューマンライフケア 千葉院内の郷 ヒューマンライフケア 鳩ヶ谷の郷

ヒューマンライフケア

見守られながらも自律した生活を大切に暮らす

ここ「インディペンデンスヴィレッジ成城西」は分譲マンションなので、すべて入居者の管理組合が自主的に運営している。住民はそれぞれ自由な生活を楽しむ。日々の暮らしは管理会社の事務局が生活全般にわたってサポートする。現在の入居者77名に対してスタッフは47名と、まさにフェイスツーフェイスの行き届いたサービスが特徴だ。マネージャーの

春藤康仁さんは、「家族的な雰囲気大切にしながらも、入居者の方が精神的、身体的に自律して暮らせるようお手伝いをしています。また三度のおいしい食事と、いつでもお元気でいられるよう身体機能を維持する目的でフィットネスに力を入れています。万一介護が必要になったときも、訪問介護や訪問医療、訪問歯科、訪問理美容などを紹介、適切なサービスが受けられます。」

いつまでも元気でいたい、最後まで自分らしく生きたい…その願いを確実にかなえてくれる住まいなのがうれしい。

小田急線「喜多見」駅から徒歩3分の、閑静なシニア向け分譲マンション。そこには新しい老後の生き方があった。



インディペンデンスヴィレッジ成城西



施設内にある、デイサービスと訪問サービスを行う、小規模多機能型施設「きはち」

知識とは、介護の一般知識はもちろん、入居者一人ひとりの健康や性格の理解、さらに医療の専門知識など多岐にわたる。舞浜倶楽部では「ケアの質はスタッフの質」であるとして、人材育成に力を注いでいる。「緩和ケア研修センター」を設立し、スタッフは週1回専門家の研修を受けるようになっていく。研修はスタッフ毎にレベルを合わせて行われているという。

スタッフのみならず、一般市民や入居者、家族を対象とした勉強会も行うなど社会の

啓蒙活動にも積極的に取り組んでいる。「日本人は真面目ですね。一般の方への勉強会は日曜日に開催しているのですが、参加率がスウェーデンと比べて高いと感じます」(ストラネル社長)

スウェーデンの介護が日本の介護を進化させる

こうしたバックボーンのある舞浜倶楽部の介護には、スウェーデンの介護理念と、技



日本人が親しんだヒノキを使った浴槽がある

住空間の様ざまな所に取り入れている。床は杉の無垢板、壁は珪藻土、そして建具には格子戸や引き戸など

スウェーデンの技術と、日本の文化が融合した、つい足を運びたくなる生活空間がここにある。

術がふんだんに取り入れられている。特に注目したのは、スウェーデンで確立された『タクトイルケア』だ。手足や背中をやさしく包み込むように触れ、リラクセスさせる。これは「緩和ケア」手法で、肌と肌の触れ合いによる「コミュニケーション」によって、身体の痛みや不安感を抑える効果があるという。実際に重度の認知症だった入居者が、落ち着きを取り戻すことがよくあったそうだ。

家族も入居者と一緒にこの自慢の料理を食べることができ。家族の来館は頻繁で、24時間いつでも面会は可能。毎日平均すると20名は来ているという。

「浴槽はヒノキを使用しています。リラクセスして欲しいので、基本的に機械浴は使わない方針です。食事も暮らしの中で重要なポイント。日本の料理は細やかで、栄養面や見た目も素晴らしい。その良さを存分に引き出すため、調理スタッフの中に高級レストラン経験者が5名いて腕をふるっています」